

『#容疑者 X の献身』（東野圭吾著）を読んでみた。著者は『放課後』で江戸川乱歩賞を受賞し、小説家デビュー。本書で第 134 回直木賞受賞。日本推理作家協会理事長を、また直木賞の選考委員を務めた。本書はガリレオシリーズ第 3 弾。日本をはじめ、韓国、中国、インドでそれぞれ映画化されているほか、舞台劇にもなっている。

弁当屋で働く評判の女性 HY は一人娘の M と仲良く暮らしていた。ある日、二人が暮らすアパートへ HY の元夫 T が彼女たちの居場所を突き止め訪ねてくる。どこへ引っ越してもまるで疫病神のように現れ、暴力を振るい金を無心する T を、HY 親子は揉み合いの末に、誤って殺してしまう。今後の成り行きを想像し、呆然とする HY 親子に救いの手を差し伸べたのは、隣人の天才数学者 I だった。彼は自らの論理的思考に基づき、警察の捜査から逃れられるよう論理を駆使して的確な指示を出す。

そして翌日、旧江戸川で男性の遺体が発見される。警察は証拠品から遺体を T と断定し、HY 親子に目をつけるが、2 人の完璧なアリバイの前に、捜査は難航する。困り果てた K 刑事が、いつものように友人の Y（別名ガリレオ）に相談を持ちかけると、I と Y は大学時代の友人であったことが判明する。当初は傍観していた Y だったが、やがて I が犯行に深く関わっていると思い至り、独自に解明に乗り出していく。

これから先に犯人についての記述があるため、読むつもりのある方は読後に参照のこと。

I と Y との知恵比べが展開されるが、結局、HY 親子を庇うため、名も知らぬホームレス（最後まで身元も名前も出ない）をわざわざ殺して捜査を攪乱し、最終的に I が自首することになる。Y は I の捜査攪乱の動きを察知しており、I の HY への「愛」の深さに思いを巡らすのであった。

本書で一番の問題点は、「名前も提示されないホームレスの殺害」である。社会的に無視された存在を物語の都合で犠牲にしてよいのであろうか。フィクションであるからといって「誰が犠牲になってもよいのか」。

私が感じた「倫理的な違和感」は、作品の根幹にある「人間の価値」、「犠牲の意味」、「愛と暴力の境界」を問うものである。

一方で、倫理的に許されない行為であっても、それが「愛」や「自己犠牲」として描かれることで、読者に問いを投げかけているとして評価する者もいるよう

だ(だから直木賞を受賞し、何度も映画化されるのであろう)。一部の評論家は、Iの行動を「論理的な美しさ」として評価し、倫理的問題はあえて物語の外に置かれているとしている。つまり、推理小説としての完成度を優先し、倫理的な違和感は「物語の装置」として機能しているという立場である。

私は、著者の「加賀恭一郎シリーズ」が好きなのであるが(加賀恭一郎は、冷静沈着でありながら、被害者や加害者の心に寄り添う姿勢を持ち、事件の背後にある人間関係や感情の機微に深く踏み込む探偵であり、殺人は単純な動機ではなく、心理の闇や社会的背景に根ざしていると考える)、その著者が本書のような倫理的に問題のある小説で直木賞をとったことは返す返す残念でならない。

評価：★★★★☆☆